

おもしろ！城郭つうしん 第11回

三河物語

<小牧・長久手の戦い>

大河ドラマ「どうする家康」ではついに石川数正が出奔しました。その原因についてはドラマなりの解釈がありました。流れをみていくと一番のきっかけになったのは小牧・長久手の戦いであったように思われます。

この戦いは、天正12年(1584)の3月から11月にかけて、羽柴秀吉軍と徳川家康・織田信雄軍のあいだで行われたものです。徳川家康の家臣である大久保彦左衛門がのちに書いた『三河物語』にも記録が残っています。その中で石川数正について気になる文章があります。今回はこの部分を取り上げて「どうする家康」で描かれた石川数正の出奔を考えてみたいと思います。

小牧山に相残坂井左衛門督申けるは、くわんばく殿押て被出けれど、おぼた筋之儀心元なく存ずれ。是寄ふたゑぼりを押やぶりて、こことく陳屋に火をかけてやきはらふ物ならバ、くわんばく殿もはいぐん可有と躰給へ共、其比寄、石河ほうき守はくわんばく殿へ心之有間、其儀、ぶ被然とて、ほうき之守一ゑんに躰ざれば、左衛門督八手にあせをにぎって、しらあわをかミていかれ共、ほうき守すゝまざれば打おきぬ。

この史料は『三河物語』の印影本を直接読んだものです。かな言葉が多いので読みづらくなっています。これを現代語訳にしたものを紹介します。

「小牧山城にのこっていた酒井左衛門督が、『関白殿が出撃なさり、小幡城のあたりが心配だ。ここから二重の堀を押し破って、関白殿のすべての陣屋に火をかけて焼き払ったならば、関白殿も敗退するだろう、』と進撃しようとしたが、その当時から石河伯耆守(石川数正)は関白殿に心を寄せていたので、そのようなことはすべきで

はないといっこうに進撃しないのでそのままとなった。」

この点については前回の記事で紹介した通り、数正が秀吉に内通していたうわさがあったようです。『三河物語』でも同じように書かれています。もし前々から内通していることがわかっていたら、一大事ですから早々に確認をとったと思うのですが、そのまま家康方として合戦に参加させていたのはなぜでしょうか。

「どうする家康」での描き方をみると、まず秀吉の人質要求にかかわって揺れ動いていた様子が見えがえします。それに加えて、家康が秀吉を破って天下を取ろうとする考えに反対しています。ここには秀吉が関白に就任したという事実が横たわっています。関白とは、公家の中で最高の役職で、天皇に次ぐ権力をもつ位になります。武士ではじめて関白になったというニュースは人々を驚かせたことでしょう。数正も衝撃を受けたようです。関白である以上は秀吉に対して家康はとてまかなわない。家康に反抗するわけではないが、そう思う以上家康のもとにはいられないというのが数正の気持ちではなかったのでしょうか。小牧・長久手の戦いで勝利したと主張し、秀吉を滅ぼそうとする大きな動きに釘をさす形で数正は去っていったように思われます。皆さんはどのようにお考えでしょうか。

以上をもちまして石川数正シリーズを終わりにさせていただきます。